

仙台市文化財調査報告書第300集

仙 台 城 跡 登城路 1 次調査

—平成17年度 調査報告書一



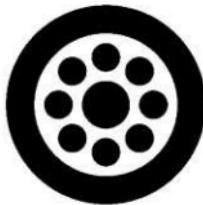
2006年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第300集

仙 台 城 跡 登城路 1 次調査

—平成17年度 調査報告書一



2006年3月

仙台市教育委員会

序 文

慶長5年〔1600〕、初代仙台藩主伊達政宗が仙台城の縄張り始めを行い、城下に仙台のまちづくりを行ってから四百年余りが過ぎ、仙台市は人口100万人を超える東北地方の中心都市となりました。市の中心部が近代的なビルの林立する都市化の波にさらされていく中にあって、仙台城跡は青葉城や天守台といった愛称で、市街地から最も近い緑豊かな場所として市民から親しまれてきました。

遺跡としての仙台城跡は、平成9年度から15年度まで行われた本丸跡石垣修復工事に伴う発掘調査や平成13年度から始められた総合的な学術調査によって、中世の山城であった千代城、そして伊達氏の居城としての全容が次第に明らかになってきました。

これらの発掘で新たに判明した複数の時期に渡る石垣構築の変遷や、ヨーロッパ産のガラスや金銅金具等の貴重な出土品などから、仙台城跡は平成15年8月、我が国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けて、仙台城跡整備基本計画が策定される等、仙台城跡の様々な魅力を引き出すための取り組みが始まっています。

こうした中で、平成17年度は仙台城跡登城路に関する調査として、沢門跡から本丸石垣下の時の人鼓跡付近にかけての遺構確認のための発掘調査と土堀の測量調査が行われ、城郭として機能していた当時の登城路の解明につながる様々な資料を得ることができました。

今回の調査事業及び、調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からのご指導、ご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げますとともに、本報告書が研究者のみならず、市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成18年3月

仙台市教育委員会
教育長 奥 山 恵美子

例　　言

1. 本書は、平成17年度仙台城跡登城路1次調査の報告書である。
2. 調査は、仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）が担当した。
3. 調査及び本書の作成・編集にあたっては、仙台市教育委員会文化財課仙台城史跡調査室および、派遣調査員古川久雄・村尾政人（株式会社島田組）がこれにあたった。
4. 報告書の作成は仙台市教育委員会 橋本顕嗣の責任・指導のもとに次のとおり分担した。
本文執筆　橋本 顕嗣（I・II・IV・V章）
古川 久雄（III章…4・5・V章）
村尾 政人（III章…1・2・3・6・7・8）
編集は橋本・古川・村尾がこれにあたった。
5. 各トレンチの遺構実測および土層断面実測は株式会社GIS仙台に委託した。
6. 土壘の測量は株式会社東北地形社に委託した。
7. 遺構図の平面位置図は平面直角座標系X（日本測地系）を用いており、文中で記した方位角は真北線を基準とし、高さは標高値で記した。
8. 遺構略号は、今遺構にS-を付した。（本調査においては他の仙台城跡の調査との区別をするためS-1401からの通し番号を付した。）
9. 本報告書の土色については、『新版標準土色表』（古山・佐藤：1970）を使用した。
10. 調査及び報告書作成に関する諸記録、出土遺物などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

目　　次

序　　文	
例　　言	
I　はじめに	1
II　仙台城跡の概要	3
III　調査の成果	7
1. 1トレンチ	7
2. 2トレンチ	8
3. 3トレンチ	10
4. 4トレンチ	12
5. 5トレンチ	13
6. 6トレンチ	14
7. 7トレンチ	16
8. 8トレンチ	17
IV　土壘の測量調査について	21
V　まとめ	21
写真図版	22

I はじめに

1. 調査目的・経過

平成17年度仙台城跡登城路！次調査は、遺構確認のための発掘調査として沢門跡南側土壘及び沢門跡推定地平場を、平成17年〔2005〕12月9日から翌年1月31日まで、沢門跡南側上堀及び中門跡北側土壘の遺構現況測量調査を平成18年〔2006〕3月1日から同年3月13日まで実施した。発掘調査面積、測量調査面積は、それぞれ青葉山公園として管理されている仙台市有地内の75m²と1,835m²である。

調査の主たる目的としては、①調査地点に存在する土壘の現況測量調査及び発掘調査による遺構確認、②登城路にかかる遺構検出、③沢門にかかる遺構検出、である。さらに、今後予定されている仙台城跡登城路の整備に向けて、表土から遺構検出面までの堆積層の厚さ、及び近現代の擾乱を受けている範囲等の情報を得ることである。

調査地点の現況は、市道青葉城線に沿った歩道脇の林及び草地で、各所の地表上に径50cm大の石材が点在している。地形的には青葉山丘陵北斜面の急傾斜地であり、標高は60m～93mである。

発掘調査区は沢門跡南側上堀のうち東西方向の上堀に1～3トレンチ、南北方向の土壘に1～7トレンチ、南北方向の土壘北側の沢門跡推定地の平場に8トレンチの調査区をそれぞれ設定した。

調査は、年末年始の歩行者に対する安全管理の面から、12月中は1～3トレンチ及び8トレンチの調査を行い、1月から4～7トレンチの調査に着手し、調査が完了したトレンチから順次埋め戻しを行うこととした。12月9日より、3トレンチから安全フェンス設置及び表上の掘削を開始し、12月12日からは1・2トレンチの安全フェンス設置と表土掘削を開始した。精査の結果、1～3の各トレンチで、遺構及び整地層を検出した。8トレンチについては12月16日にフェンス設置を行い、12月21日から表土掘削及び精査・遺構検出作業を開始した。1～3トレンチのトレンチ全景撮影及び実測は12月27日までに終え、12月28日には3トレンチの埋め戻し及びフェンスの撤去を行い、12月中の調査を終了した。残りの4～8トレンチの調査は1月5日、8トレンチの調査から再開し、1月6日に残りの4～7トレンチのフェンスを設置し、1月10日から表土掘削を開始した。精査の結果、4～8の各トレンチで遺構及び整地層を検出した。なお、4～7トレンチにおいては調査区にかかる地表に露出していた石材については原位置を保っていないことが判明した。4～8トレンチについては1月25日までにトレンチ全景撮影および実測を終え、1月31日に埋め戻し・フェンス及び機材の撤収を完了した。

土壘測量調査は、3月1日から作業を開始し3月13日に終了した。

2. 調査要項

(1) 遺跡名称 仙台城跡（宮城県遺跡地名登載番号01033 仙台市文化財登録番号C-501）

(2) 調査地 仙台市青葉区川内地内

(3) 調査主体 仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）

(4) 調査担当 文化財課 課長 阿部 功

仙台城史跡調査室長 金森 安季

主任 熊谷 俊朗

主任 渡部 紀

主事 鈴木 隆

文化財教諭 橋本 顯嗣

派遣調査員 古川 久雄・村尾 政人（株式会社鳥田組）

(5) 調査期間 平成17年12月9日～平成18年3月13日

(6) 調査面積 75m²（発掘調査）、1,835m²（土壘測量調査）



城跡番	城跡名	城跡番	城跡名	城跡番	城跡名	城跡番	城跡名
1	仙台城址 天守台御前石垣(調査未終)	15	荒雄西御跡	29	芦井村的森跡	43	百合原御跡
	16	茂庭さんとう城址	30	竹添東御跡	44	長野東御跡	
	17	宮沢御跡	31	竹添東御跡	45	宅地の跡	
2	若林城跡	18	河井城跡	32	五城中学校北東跡	46	古事神社跡
3	北山城跡	19	日置御跡	33	与兵衛御先跡	47	その他の中・近県の主な遺跡
4	西野城	20	今泉道跡	34	解説・石碑	48	山形村通南道跡
5	渡り向城跡	21	小原(西野)跡	35	熊野御石の浦	49	豊野八幡跡
6	小鶴城跡	22	寺原・廻所	36	奥高守御跡石出土	50	仙台東奥高守跡
7	第六城跡	23	雲深御跡	37	鈴木敷地文永1年御跡	51	カナクソ遺跡
8	越後城跡	24	猪ヶ塚伊達宿所	38	第六大口御家の跡	52	名ノ城跡
9	八代御跡			39	大晦市法式の跡	53	義理間道跡
10	部分御跡			40	第六大口御家の跡	54	大根田内柴原
11	南口御跡	25	東便貫	41	馬頭石御跡	55	町正御跡
12	津波御跡	26	大崎八幡宮	42	片平山合大神宮の御跡	56	松土手(油免土手)
13	鹿島大蛇跡	27	西側八幡宮	43	馬頭石御跡	57	山田トノカ道跡
14	羊角跡	28	熊野新宮社御跡	44	熊野新宮社御跡		

第1図 仙台城跡と周辺の遺跡

II 仙台城跡の概要

1. 仙台城跡の地理的環境と現況

仙台城跡は仙台市街地の西方に位置し、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を流れる広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流の竜ノ口渓谷の浸食により高さ70mほどの断崖を形成しており、その丘陵上の平場（標高115～117m）に仙台城の本丸は位置する。本丸の規模は、東西245m、南北267mを計り、南側は落差約40mの竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる高さ約70mの断崖に守られた天然の要害となっており、比較的傾斜の緩やかな本丸北側には約17mの高さを有する石垣が築かれている。尾根続きとなっている本丸西側には御裏林と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残るために国指定天然記念物青葉山となっている。御裏林跡では、3条の大規模な堀切などが確認されている。本丸跡の麓部の河岸段丘には二の丸跡と三の丸跡が位置しており、二の丸跡は仙台上町段丘面、三の丸跡は仙台下町段丘面と高度を下げている。蛇行する広瀬川に西から二本の大きな沢が走り、この沢に挟まれ御裏林を背にした場所に二の丸跡が位置する。二の丸跡東側に位置する大手門跡付近には、約9mの高さの石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和12年に復元されている。さらに低位に位置する三の丸跡は、外郭を水堀と土塁に囲まれ、門跡付近には石垣が残存している。三の丸跡の東側、河岸段丘の最も低位に位置する追廻地区の広瀬川護岸部分には、260mに及ぶ石垣が残存している。

2. 仙台城跡の歴史的背景

仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。岡ヶ原の戦い直後の慶長5年[1600]12月24日、城の縄張りが開始され、翌年1月から普請に着手、工事は慶長7年[1602]5月には一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。残された絵図などからみると、本丸への登城路は、大手門を通じて中門を経て本丸詰門に至るものと、巽門・清水門・沢門を通るものがある。

絵図や文献などによれば（註1）、本丸には詰門に入った東側に天皇家や将軍家を迎えるための御成門があり、華麗な障壁画や欄間彫刻に彩られた大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖面に造られた懸造、さらには能舞台・書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって造られた桃山文化の集大成といえる建物群が威容を誇っていたと考えられている。西脇櫓・東脇櫓・良櫓・巽櫓は三重の櫓であったが、正保3年[1646]4月の地震によって倒壊したとする記事がみられ（註2）、以後復興されずに明治を迎えたものとされている。

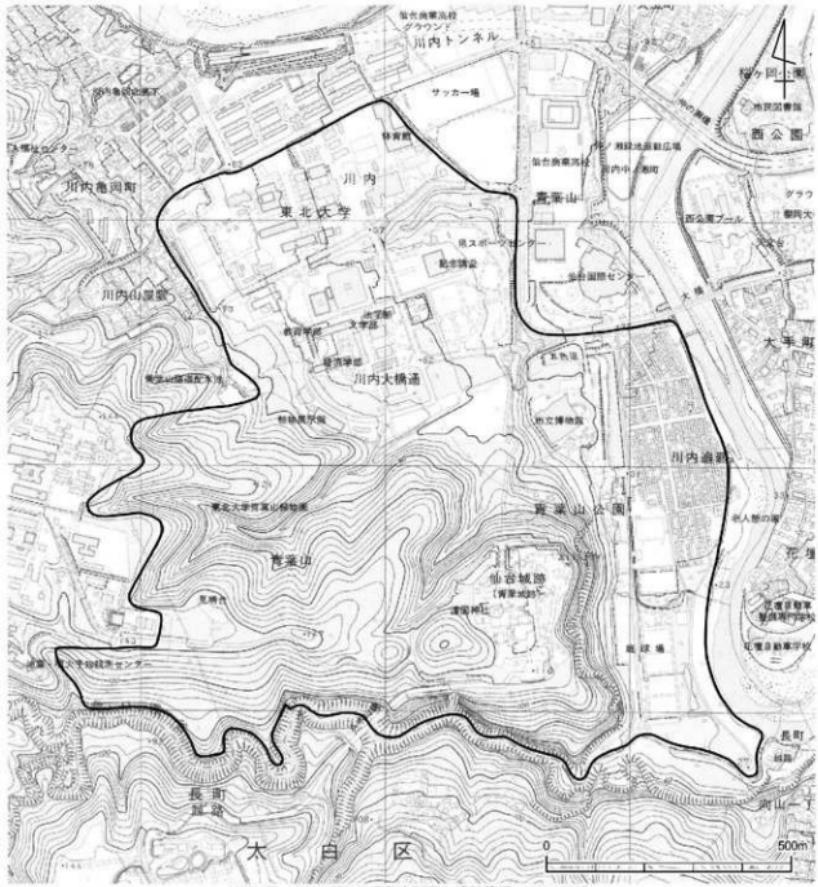
本丸の建物群は江戸時代の度重なる災害に加え、明治維新後の取り壊しなどにより失われ、二の丸の御殿群も明治15年[1882]の大火によって焼失した。唯一仙台城の面影を伝えていた国家の大手門及び脇櫓も昭和20年[1945]

7月、太平洋戦争による米軍の空襲によって焼失した。

現在では、本丸北壁や随所に点在する石垣、本丸西側の堀切、三の丸の周囲を囲む堀と土塁などが往時の仙台城を偲ぶ貴重な遺構となっている。また、伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する16世紀代の文献記録も残っており（註3）、中世山城が存在していた可能性も指摘されている。



第2図 焼失以前の大手門と脇櫓（昭和10年頃）



第3図 仙台城跡（現況地形図と遺跡範囲・1/10,000）



第4図 仙台城本丸現存（田期）石垣
解体修復工事前（北西から）



第5図 仙台城本丸現存(Ⅲ期)石垣
解体修復工事前(北東から)

3. 仙台城跡の発掘調査

仙台城跡のこれまでの調査には、昭和58年〔1983〕から継続的に実施されている東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査（註4）と、仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58・59年〔1983・1984〕に実施された三の丸跡の発掘調査（註5）があり、本丸跡では石垣修復工事に伴う発掘調査が第1次発掘調査である。

本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が平成9年〔1997〕度から実施されている。（註6）この石垣修復工事に伴う本丸1次発掘調査は、平成9年〔1997〕7月から石垣解体に先行する事前調査と、翌年10月から開始した解体工事と並行する発掘調査からなっている。解体工事は平成12年〔2000〕9月に石材9,106石と、Ⅱ期石垣124石の解体をもって終了し、石積工事を同年12月から開始し、平成16年〔2004〕3月に工事が終了した。

石垣解体に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より二時期にわたる旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、石垣基部の調査や石垣断面構造の記録化により、Ⅰ期からⅢ期までの石垣の変遷や構造を確認した。石材調査では各種の刻印や朱書き、墨書きなどを多数検出し、矢穴や石材加工技術の変化も確認している。石垣は表面の「石積み」様式の変化とともに、背面の土木工法の変容が顕著であり、発掘調査で石垣背面の土木工事の痕跡を考古学的な手法によって層位的に精査し、盛土の重複関係や採集遺物の分析からみた石垣変遷を、文献調査との照合により大別している。築城期には、旧地形や中世山城「千代城」の繩張りを利用して斜面を切り土しながら石垣を構築（Ⅰ期）し、地震によりこの石垣が倒壊した後、築城期の石垣形状を一新する修復工事が行われて石垣が再構築（Ⅱ期）され、その後の地震によりこのⅡ期石垣も倒壊し、現存石垣に全面改築（Ⅲ期）されたとして検討を重ねている。（註7）

註1 「仙台城下絵図」（寛文4年〔1664〕宮城県図書館蔵）や「青山公造制城郭本写之略図」（四代藩主綱村時代、17世紀後半（推定）宮城県図書館蔵）には本丸御殿の建物群が描かれ、「貞山公治家記録」にも大広間の記事が散見できる。建物群の考察については、佐藤巧「前台城の建築」（仙台市教育委員会「仙台城」1967）・「仙台城館および門辺建物復元考」（仙台市博物館『測定研究報告第6号』1986）・伊東信雄「仙台城の歴史」・三原良吉「仙台城年表」（仙台市教育委員会「仙台城」1967）などがある。

註2 菅山公治家記録、正保3年〔1646〕4月28日條

註3 貞山公治家記録、慶長5年〔1600〕12月24日條

註4 東北大学埋蔵文化財調査年報1～17（東北大学埋蔵文化財調査センター1985～2002）

註5 発掘調査報告書「仙台城二ノ丸跡」（仙台市教育委員会1983）

註6 仙台城跡石垣修復等調査指導委員会（平成13年度に仙台城石垣修復工事専門委員会と改編）資料・議事録（仙台市建設局1997～2003）

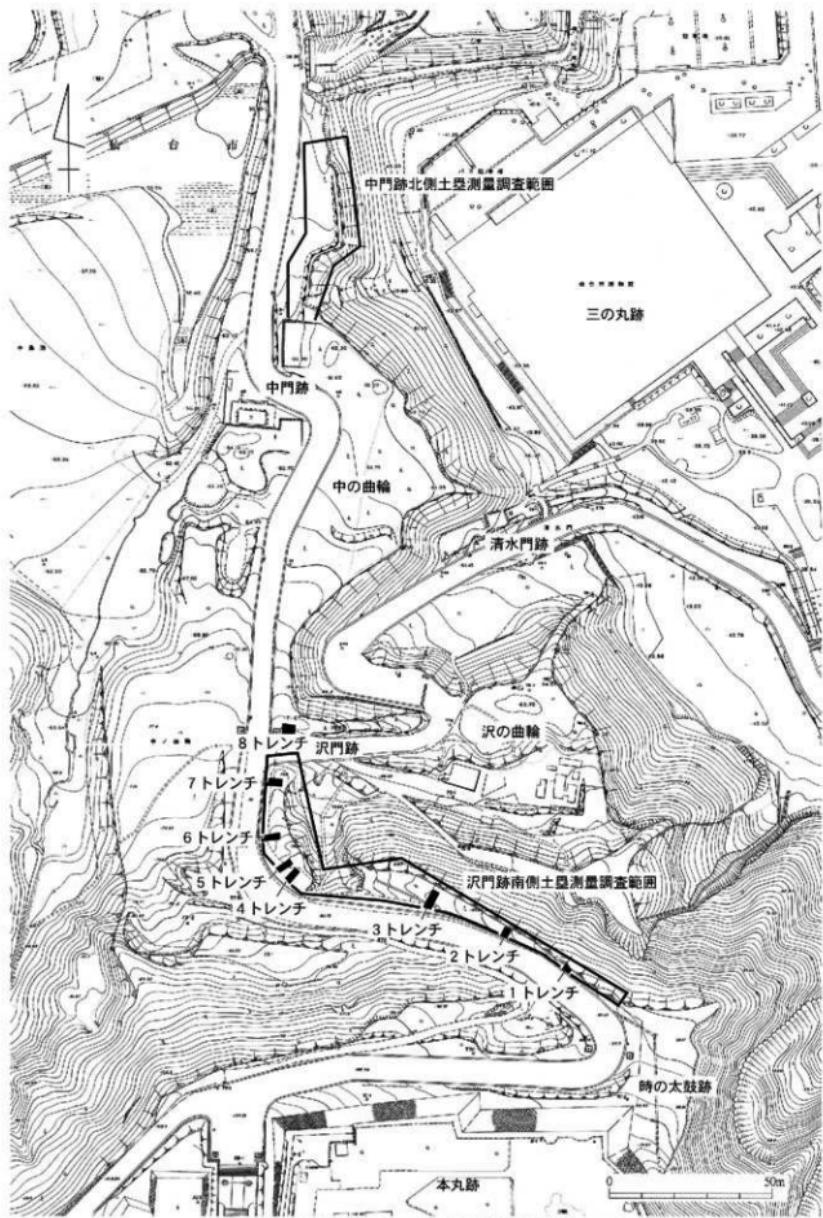
註7 本丸1次発掘調査成果に係る主な参考文献：金森安孝「仙台城本丸跡の発掘調査」（『考古学ジャーナル44号』1999）・金森「仙台城本丸の発掘と出土陶磁」（『貿易陶磁研究No.19』1999）・金森/我妻仁「仙台城本丸跡 築城期及び修復石垣の発見」（『考古学ジャーナル45号』2000）・我妻「仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷」（『宮城考古学第2号』2000）・金森「仙台城本丸跡石垣修復に伴う発掘調査」（『日本歴史第625号』2000）・我妻「仙台城本丸跡Ⅲ期石垣における階段状石列の構造と役割（予察）」（『宮城考古学第3号』2001）・金森/我妻「仙台城本丸跡Ⅲ期石垣の発掘調査－現存石垣の構築技術－」（『考古学ジャーナル47号』2001）・金森根本光一「仙台城石垣の石材調査」（『考古学ジャーナル48号』2002）・伊藤謙「仙台城石垣の石材調査」（東北芸術工科大学『石垣昔普請の風景を読む』2003）・金森「仙台城本丸跡 1次調査 第4分冊 石垣図版」（仙台市教育委員会 2004）



第6図 本丸北壁石垣北東角部
旧石垣（Ⅰ・Ⅱ期）検出状況（北東から）



第7図 本丸北壁石垣背面
階段状石列検出状況（北西から）



第8図 仙台城登城路周辺の地形と調査地点位置図 (1/1,500)

III 調査の成果

各調査区が離れているため、近接する4・5トレンチを除いた基本層序は、統一せずに調査区ごとに記載する。

1. 1 トレンチ

今回の調査地の中では最も南に位置する。調査区は北東側へ急激に落ちる崖面と南東側の市道青葉城線に挟まれた狭い平坦部に、 $2.5m \times 2.0m$ のトレンチを設定した。周辺には石垣及び石組側溝に使用された可能性のある石材が散乱していた。

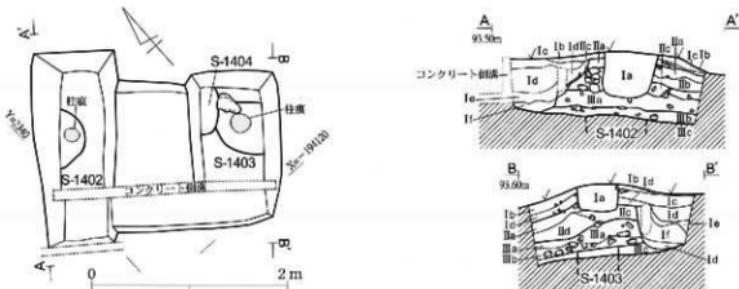
(1) 層序

層序は大きく分けてI層(表土・擾乱)、II層(盛土)、III層(整地層・構造埋土)の3層を確認した。I層の表土・擾乱には多くの円礫(径10~15cm大)を含んでいる。II層はややしまりのある明黄褐色細砂土を主体とする。最下層からは残存状態が良好な瓦片が出土した。III層は硬くしまった黄褐色粘質土で、ほぼ水平の堆積が確認された。土層内には地山起源の黄褐色土・岩盤を入為に径0.5~1cmの大きさで碎いた細片が混入されていることから、基盤整備等の整地層と考えられる。

(2) 造構と遺物

S-1402(ピット) 調査区の北西側にてピットの南東側半分を検出した。全容は不明であるが、不整な楕円形と考えられる。ピット内の南東側にて小規模の柱痕を確認した。直径が0.6m、柱痕の直径は0.18mを測る。整地層であるIIIc層を切り込んでおり、埋土内より瓦小片が出土した。

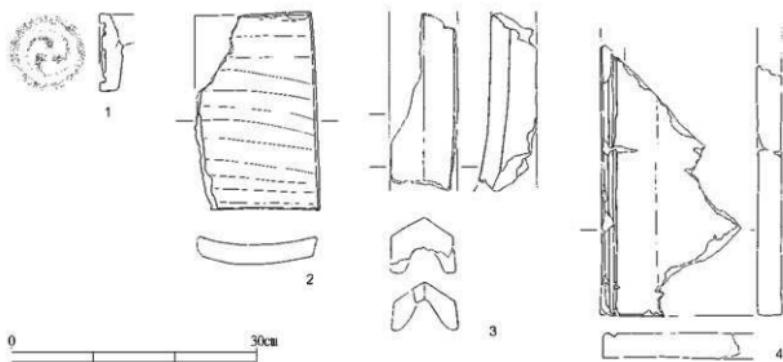
S-1403(ピット) 調査区の南東側にて北側半分を検出した。半分のみの検出であることから全容は不明であるが、不整な楕円形と考えられる。ピット内の北側中央にて柱痕を確認した。直径0.5m、柱痕の直径は0.2mを測り、整地層であるIIIc層を切り込んでいる。当ピットは北側に近接するS-1404に切られている。



第9図 1トレンチ平面・断面図 (1/50)

第1表 1トレンチ土層記注表

層番	標高	土色		土性		特徴	しまり	備考
		土名	色名	土質	性状			
I a	GTRN0	黒褐色	繊維粘土	なし	なし	泥化現象、円礫 (径15~20cm大) を多く含む。		
I b	GTRN1	褐灰色	繊維粘土	なし	なし	大土 (褐粘土)。		
I c	GTRN2	明灰褐色	繊維粘土	ややあり	なし			
I d	GTRN3	黄褐色	繊維粘土	ややあり	なし	円錐形柱孔付、現代廃土の施用層。		
I e	HO.856	明黃褐色	繊維粘土	あり	なし	円錐形柱孔付。		
II f	GTRN4	黒褐色	繊維粘土	あり	あり	S-1404に近い柱孔付細胞粘土を少量含む。		
II g	GTRN5	明灰褐色	繊維粘土	ややあり	なし	柱孔ブロック含む。		
II h	GTRN6	褐灰色	繊維粘土	あり	あり	コンクリート倒壊物の瓦片及び瓦礫付。		
II i	GTRN7	灰褐色	繊維粘土	あり	あり	コンクリート倒壊物の瓦片及び瓦礫付。		
II j	GTRN8	灰褐色	繊維粘土	あり	あり	柱孔 (径10~15cm大) を多く含む。		
II k	GTRN9	黄褐色	繊維シルト	あり	あり	地山の岩盤ブロック2.5m厚の黄褐色シルト (径0.5cm大) を少量含む。		
II l	GTRN10	灰褐色	繊維シルト	あり	あり	地山の岩盤ブロック2.5m厚の黄褐色シルト (径0.5cm大) を少量含む。		
III m	GTRN11	明灰褐色	繊維シルト	あり	あり	地山の岩盤ブロック2.5m厚の黄褐色シルト (径0.5cm大) を少量含む。		
III n	GTRN12	明灰褐色	繊維シルト	あり	あり	地山の岩盤ブロック2.5m厚の黄褐色シルト (径0.5cm大) を少量含む。		
III o	GTRN13	明灰褐色	繊維シルト	あり	あり	地山の岩盤ブロック2.5m厚の黄褐色シルト (径0.5cm大) を少量含む。		
S-1402	HO.860	灰褐色	繊維シルト	あり	あり	ミッタ壁付、地山由来の壁面 (厚さ1.2m) を多く含む。EGRN0構造付 (厚さ2~5cm大) を多く含む。且片厚2cm大を少量含む。		
S-1403	HO.876	灰褐色	繊維シルト	あり	あり	ミッタ壁付、地山由来の壁面 (厚さ1.2m) を多く含む。EGRN0構造付 (厚さ2~5cm大) を多く含む。且片厚2cm大を少量含む。		
S-1404	HO.876	灰褐色	繊維シルト	あり	あり	ミッタ壁付、地山由来の壁面 (厚さ1.2m) を多く含む。EGRN0構造付 (厚さ2~5cm大) を多く含む。且片厚2cm大を少量含む。		



第10図 1トレンチ出土遺物実測図 (1/6)

第2表 1トレンチ出土遺物記録表

四面番号	種類	遺物番号	遺構・部位	高さ (cm)	特徴 (目測値の単位: cm)
第1003 1	軒丸瓦	8	Ⅲ	(0.22)	三巴文、側面: 斜斜、底上: 平、長さ94.4、幅(2.0)、厚さ2.3
第1003 2	熨斗瓦	29	Ⅲ	(1.20)	三巴文、側面: 直斜、底上: 斜、長さ24.4、幅(15.1)、厚み2.5
第1003 3	筒瓦	181	Ⅲ	(0.40)	軒(21.9)、幅(5.3)、高さ(7.7)
第1003 4	屋半瓦	185	Ⅲ	(1.57)	輪成: 直斜、底上: 平、高さ(28.1)、幅(16.9)、厚さ3.3

S-1404 (ピット) 調査区の南東側にて検出した。平面形は南東側の一部のみの検出であるが、不整な楕円形と考えられる。規模は直径が0.5mを測る。当ピットは南側に接するS-1403を切っている。

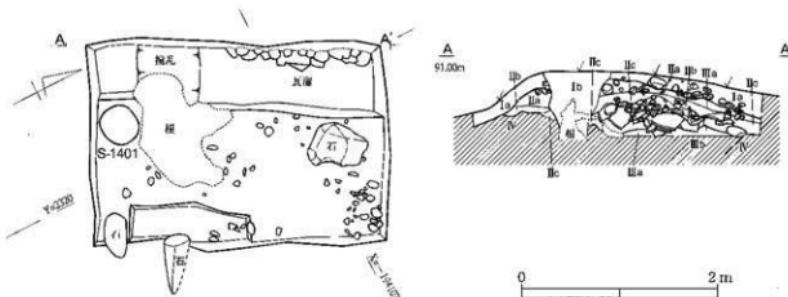
出土遺物 Ⅱ層: 塚平瓦3点、駒付平瓦1点、三巴文軒丸瓦1点、三巴文軒棟瓦2点、棟瓦5点、熨斗瓦2点、冠伏間瓦3点 Ⅲ層: 塚平瓦1点、駒巴瓦1点、棟瓦1点、平瓦1点、冠伏間瓦1点

2. 2トレンチ

当調査区は、1トレンチと同様の北東側へ急激に下がる崖面と南側の市道に挟まれた狭い平坦部に、3m×2mのトレンチを設定した。東側には石垣及び石組側溝に使用されたと考えられる石材が散乱している。

(1) 層序

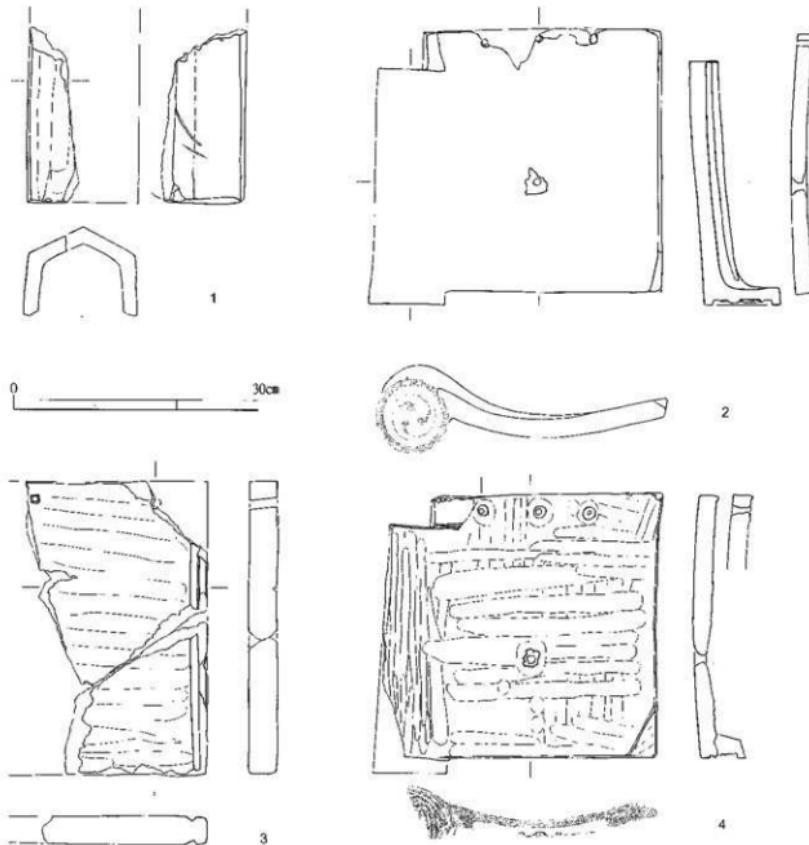
層序は大きく分けてⅠ層(表土・擾乱)、Ⅱ層(盛土)、Ⅲ層(整地層・造構埋土)、Ⅳ層(地山)の4層を確認した。Ⅱ層は黄褐色細砂質シルト層を主体とし、Ⅰ層と共に多くの円縁(径10~15cm大)を含んでいる。最下層からは完形の棟瓦が車なった状態で出土した。Ⅲ層は硬くしまった黄褐色粘質土で、ほぼ水平の堆積が確認された。土



第11図 2トレンチ平面・断面図 (1/50)

第3表 2トレンチ土層記註表

遺構	層位	土 色		土 壤	性 質	施 工
		上層部	下層部			
1a	JYH331	黒褐色	赤土(鐵色+)	なし	なし	赤土(高粘土)。
1b	JYH262	黒褐色	褐砂質シルト	なし	なし	陶土、木柱、鐵(径1cm大)を多く含む。
2a	JYH263	黄褐色	褐砂質シルト	ややあり	なし	土上、鐵(径0.5cm大)を多く含む。
2b	JYH264	灰褐色	褐砂質シルト	あり	なし	土上、鐵(径0.5cm大)を多く含む。
2c	JYH265	明黄褐色	褐砂質粘土	あり	あり	遺物(瓦片、瓦(方形に削り)、鐵(径0.5cm大))を多く含む。
2d	JYH266	明黃褐色	粘土シルト	あり	あり	葉輪形瓦、瓦(径5cm)、馬山瓦(2ヶ)JYH267-75V386、白土、青色、多色壁上、径15cmを含む。
3a	JYH267	明黃褐色	粘土シルト	あり	あり	瓦輪瓦、瓦(径3cm大)少數と壁(5cm大)、馬山瓦(2ヶ)JYH267-75V386、白土、青色、多色壁上+ブロック(2cm)を多く含む。
IV	JYH268	灰褐色	シルト	あり	あり	馬山、白土系シルト質で、縦く縛られた岩壁ブロック(0.5cm大)を多く含む。
S-1401	JYH264	にぶい青褐色	粘土シルト	あり	あり	浅山の口字系シルト質で、縦く縛られた岩壁ブロック(0.5cm大)を多く含む。



第12図 2トレンチ出土遺物実測図 (1/6)

第4表 2トレンチ出土遺物記註表

発見番号	規 級	遺物番号	通納・置位	重さ (kg)	特徴 (計測値の単位はcm)
第1回 1	冠火鉢	21	II	(0.65)	焼成: 朱好、助土: 砂、底: 砂 (2.5), 軸 (5.3), 高さ (9.7)
第1回 2	軒板瓦	42	Ⅱ	(4.34)	二型文、瓦(径2.9), 中央幅22.2, 中央幅35.0, 厚さ1.8~2.1
第1回 3	瓦平皿	187・185	Ⅱ・Ⅲ	(2.30)	焼成: 朱好、助土: 砂、長さ (36.0), 幅 (21.2), 厚さ (1.5)
第1回 4	軒板瓦	46	Ⅱ	(6.04)	焼成: 朱好、助土: 砂、長さ (37.7), 幅 (22.3), 厚さ (2.3), 斜面: 青色

層内には地山の黄褐色土、岩盤等が径0.5cmの大きさで人為的に混和されていることから、基礎整備等の整地層と考えられる。また、Ⅲ層は下層の地山を南西から北東に低くなるように浅い段状に削り込み、水平に整地していた。IV層の地山は、調査区の東西端で確認されたシルト質の洪積層である。

(2) 遺構と遺物

S-1401(ピット) 調査区西側の整地層であるⅢa層上面にて検出した。平面形状は橢円形を呈する。ピット内については、柱痕を確認することはできなかった。規模は直径が0.4mを測る。

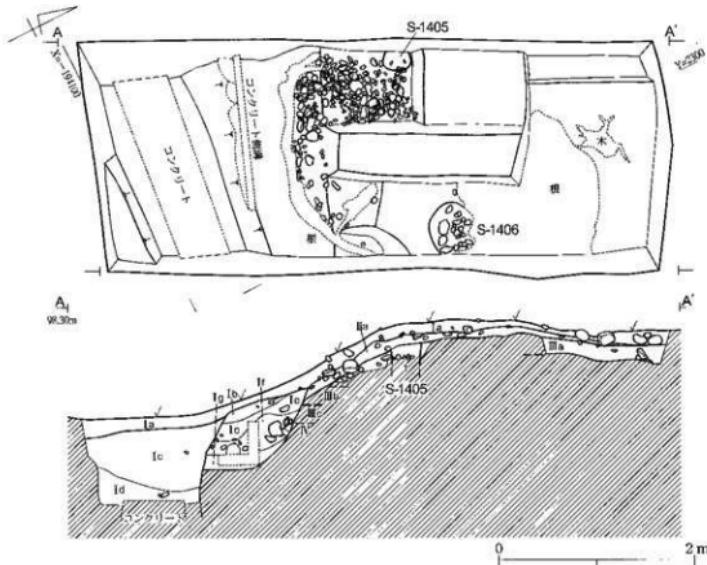
出土遺物 1層：三巴文軒桟瓦1点、冠伏間瓦1点、駒付平瓦1点、駒巴瓦1点 Ⅱ層：三巴文軒桟瓦1点、平瓦1点、桟瓦2点、冠伏間瓦2点、道具瓦1点、駒付平瓦2点、崩平瓦1点 Ⅲ層：三巴文軒桟瓦2点、三引両文軒桟瓦1点、三巴文+無文軒桟瓦1点、平瓦3点、桟瓦3点、契斗瓦5点、道具瓦1点、駒巴瓦1点

3. 3トレンチ

3トレンチ周辺は、沢門から本丸詰門下の時太鼓に至る登城路の中央にあたる。当調査区は市道青葉城線の道路際にから土堀に直行する形で、南北6m、東西2mの大きさのトレンチを設定した。上堀は道路から幅3mの半堀地を除いて北側に位置し、その背後は急激に下がる崖面を呈している。高さ1m、幅4mを測り、南北两侧の道路に平行した土壠状を呈しており、登城路に関わる可能性が高いことから、その性格を解明することを主たる目的とした。

(1) 層序

層序は大きく分けてI層(表土・擾乱)、II層(盛土)、III層(整地層・遺構埋土)、IV層(地山)の4層を確認した。II層は明黄褐色粘砂質シルト層を主体とし、I層と共に多くの円錐を含んでいる。層下面からは比較的に良好な瓦が出土した。III層はⅢa～Ⅲcの3層があり、いずれも硬くしまった黄褐色シルト質粘土で、ほぼ水平の堆積が確認できた。Ⅲa・Ⅲcの土層内には地山の黄褐色土、岩盤等が径1～3cm大的ブロックとして混入しており、その



第13図 3トレンチ平面・断面図 (1/50)

第5表 3トレンチ土層注記表

層名	層位	土 色	土質	目 立 特 性	記 述	
	土十cm	黒褐色	細粒質シルト	なし	無土(標準一)。	
T ₃	10YR6/1	黒褐色	砂質シルト	なし	無土(標準一)。	
T ₃	10YR8/6	黒褐色	砂質シルト	なし	西代の焼成灰層より上に、地山黄褐色粘土ブロック(径0.3m大)を含む。	
T ₃	50Y 1/1	明るいオーブル色	砂質土	なし	西代の焼成灰層より上に、地山ブロック(50Y明るいオーブル色)を含む。	
T ₃	10Y 2/1	黒褐色	砂質質シルト	ありあり	西代の焼成灰層より上に、(地山黄褐色粘土ブロック(径0.3m大)を含む)。	
T ₃	10YR3/2	黒褐色	砂質質シルト	ありあり	西代の焼成灰層より上に、(地山黄褐色粘土ブロック(径0.3m大)を含む)。	
T ₃	10YR4/1	にぼい黄褐色	砂質質シルト	あり	西代の焼成灰層より上に、地山砂土ブロック(径0.3m大)を多く含む。	
T ₃	10YR6/5	明るいオーブル色	粘質土	あり	西代の焼成灰層より上に、地山ブロック(径0.3m大)を多く含む。	
T ₃	10YR6/5	にぼい黄褐色	砂質質シルト	なし	過去に黒土下層、木の根、地山ブロック(黄褐色土被り)を多く含む。	
IIa	10YR6/5	にぼい黄褐色	砂質質シルト	なし	過去に黒土下層、木の根、地山ブロック(黄褐色土被り)を多く含む。	
IIb	10YR7/6	明るいオーブル色	砂質質シルト	あり	過去に黒土下層、地山ブロック(黄褐色土被り)を多く含む。	
IIa	10YR7/6	明るいオーブル色	砂質質シルト	あり	過去に黒土下層、地山ブロック(黄褐色土被り)を多く含む。	
IIIb	10YR6/6	黒褐色	砂質質シルト	あり	あり 黃褐色(?)、地山砂(?)、(地山、黄褐色土被り)を多く含む。	
IIIc	10YR6/6	黒褐色	砂質質シルト	あり	あり 黃褐色(?)、地山砂(?)、(地山、黄褐色土被り)を多く含む。	
IV	7.5YR6/5	浅灰色	シルト風化土	あり	あり 沈山砂岩の一次構造、表面のひび割れ状の水平構造(厚さ約0.5m)を有す。	
S-1405	I	10YR6/5	黒褐色	砂質質シルト	あり	あり 沈山砂岩の一次構造、表面のひび割れ状の水平構造(厚さ約0.5m)を有す。
S-1407	I	10YR4/1	にぼい黄褐色	砂質質シルト	あり	なし ピット壁には、縦(径1~2cm) 多数と、从小片を嵌入含む。

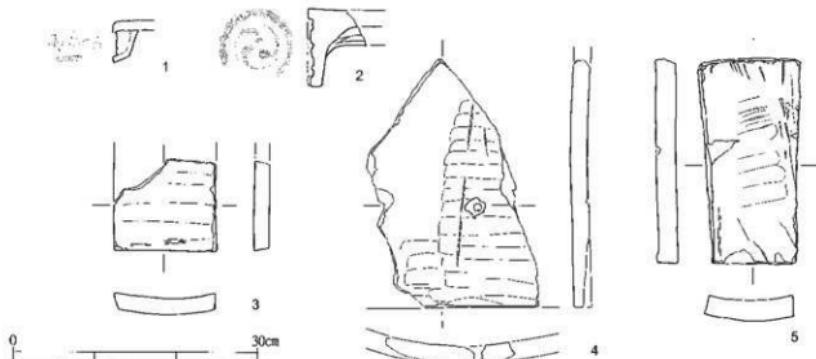
間の層であるIIIb層には径5~15cm 大の円球が多数混ざっていた。いずれも基礎整備等のために構築された整地層と考えられる。IV層の地山は北側と南側に確認できた。

(2) 遺構と遺物

S-1405(ピット) 調査区中央の西辺において東側の一部を検出した。ピットは整地層であるIIIa層上面より切り込まれている。西側半分が調査区外であるため全形は不明であるが、楕円形を呈するものと考えられる。直径が0.3mを測り、少量の円錐(径5cm大)を含んでいた。

S-1406(ピット) 調査区中央の東側にて円形のピットを検出した。整地層であるIIIa層上面より切り込まれている。直徑0.5mを測り、多数の円錐(径10cm大)と数点の瓦片を含んでいた。

出土遺物 I層：枯梗文軒平瓦1点、軒平瓦1点、三巴文軒残瓦2点、棟瓦1点、熨斗瓦2点 II層：軒丸瓦1点、平瓦2点、棟瓦1点、突斗瓦1点、道具瓦1点、駒付平瓦1点



第14図 3トレンチ出土遺物実測図(1/6)

第6表 3トレンチ出土遺物註記表

出取番号	種類	遺物番号	通称・層位	重さ(g)	特徴(剖面図の単位はcm)
第14回 1	軒平瓦	67	I	(0.08)	軒梗文、焼成: 良好、施土: 砂、高さ (1.0), 幅さ 1.9
第14回 2	軒残瓦	66	I	(0.36)	三巴文、焼成: 良好、施土: 砂、高さ (0.9), 幅さ 1.4, 直径 0.5
第14回 3	軒平瓦	31	I	(0.38)	焼成: 良好、施土: 砂、高さ (1.0), 幅さ 1.5, 厚さ 2.0
第14回 4	平瓦	130	II	(0.40)	焼成: 良好、施土: 砂、高さ (0.8), 幅 (2.1), 厚さ 2.5
第14回 5	突斗瓦	6-70	I	(1.0)	焼成: 良好、施土: 砂、高さ 2.5, 幅 1.2, 厚さ 2.5

4. 4 トレンチ

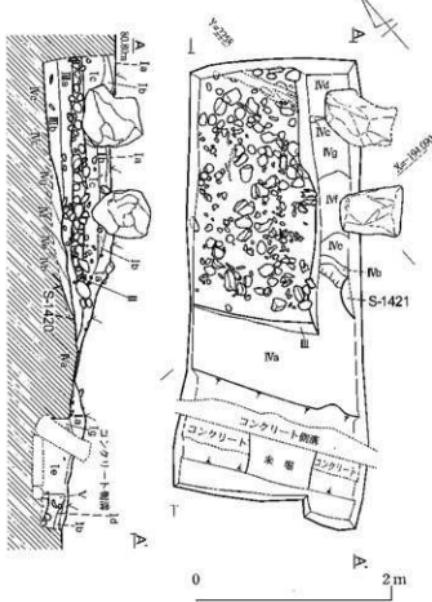
4~7トレンチは、本丸跡から降る現道路が、西向きから北へ曲がって中門跡へまっすぐ向かう右(東)側に設けた。いずれも沢門跡の南上方にあたり、そのうち4トレンチは最も上(南)で、道路がカーブするあたりである。この付近は、道筋に沿った東側の幅2~3mが路面より低く、さらに東側は高さ1~1.5mの土壘が南北方向に伸び、道路から6~10m先で谷側への急斜面となっている。土星の上面に、長径60~80cmの安山岩系の石材が2石露出しており、この石材と土壘の性格確認を主たる目的として調査区を設定した。調査範囲は、北東~南西方向に長さ4.6m、幅1.8mのトレンチとした。

(1) 層序

I層はIa~Ieに区分したが、いずれも新田の表土および近代盛土・コンクリート側溝埋土等である。

II層は土壘を主に構成している土層で、径5~20cm程度の円礫を大量に含む礫層である。主たる部分の厚さは約15cmで、下面はほぼ水平となっている。時期は瓦片以外に遺物の出土がないものの、残瓦片が出土していることから近世後半期とみられる。同様の屜層は、第3~6トレンチでも検出され、その間の調査区外や周辺にも大量の礫が地表に露出している。III層は、上位に分けたIIIa層がII層の下でやはり水平な広がりをみせ、IIIb層は下部のIV層上面が北東側へ降るのを埋めるように北東へ厚く堆積している。

IV層のうちIVa層は、一見地山と見間違うような黄褐色の混じりのない粘質土層で、トレンチ南西端に一部のみみられる地山(V層)と直接接する。このIVa層上面は後に述べるピット(S-1420)の付近で急激に北東側へ下降し、その斜面を埋めるようにIVb~IVe~IVf~IVg~IVc~IVd層が順次積み重なっている。IVa層を除く各層は、地山土を始めとする複数種の土が混合したもので、明らかに斜面を埋めた盛土(造成土)と思われる。



第15図 4トレンチ平面・断面図 (1/50)

第7表 4・5トレンチ土層記表

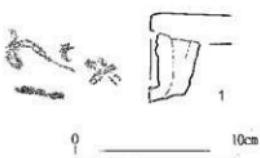
層構	岩性	土		性 能	特 徴	記 述	考 察
		上 層	下 層				
I	上層: 1. 土壘	灰褐色	シルト	なし	なし	表土上	
I-a	10Y4/22	灰褐色	シルト	なし	なし	地盤上の古代動土。黄褐色・風化砂のシルト同士と無自然の層。	
I-b	10Y3/38	黄褐色	砂質	あり	なし		
I-c	10Y3/52	灰褐色	砂質	なし	なし	10Y3上に現れた灰土。	
I-d	10Y7/6	にじみ黄褐色	砂質	なし	なし	後代の擾乱堆土。	
I-e	10Y9/41	灰褐色	砂質	なし	なし	コンクリート側溝底に堆积。	
II	10Y7/62	灰褐色	砂質	なし	なし	コンクリート側溝底に堆积。	
III	10Y7/54	にじみ灰褐色	泥質	あり	あり	コンクリート側溝底に堆积。	
III-a	7.5Y7/56	灰褐色	泥質	あり	あり	最大限の繊維を示す。ひびかる傾向。	
III-b	0.7Y7/60	灰色	泥質	あり	あり	鉄錆3mm以下の白色・灰色・暗色鐵山状層を多量に含む。	
III-c	0.7Y7/6	灰色	泥質	あり	あり	鉄錆・鐵山有致の軽度小苦く、並び少ない。並んでやや深い凹斜。	
IV-a	0.7Y7/68	灰褐色	砂質シルト	無い	なし	鉄錆微細。白色・灰褐色・灰色の塊状層を多く含む。されてしまが傾向。	
IV-b	0.7Y7/56	西褐色	泥質	あり	あり	切妻面薄。灰色・小塊をほとんど含まない。	
IV-c	7.5Y7/62	灰褐色	泥質	なし	なし	鉄錆3mm以上の崩砂層。	
IV-d	7.5Y7/78	灰褐色	泥質	あり	あり	鉄錆内に灰褐色色がドックリして現れる。	
IV-e	10Y7/64	にじみ青褐色	砂質	あり	あり	小礫混在。鉄錆3mm以下の鉄山状層を含む。	
IV-f	10Y8/54	にじみ青褐色	砂質	あり	あり	鉄錆少。鉄錆をどうぞ少ない。	
IV-g	10Y9/64	にじみ青褐色	泥質	あり	あり	鉄錆少。	
V	10Y7/51	灰褐色	シルト	あり	あり	生土。鉄錆の塊状を多く含むので青色。	
S-416	10Y8/54	にじみ青褐色	泥質	あり	あり	ラレンチア灰・サントレンチア(Va)層に近い。鉄錆を多く含む。	
S-419	10Y7/50	にじみ青褐色	泥質	あり	あり	ラレンチア灰・サントレンチア(Va)層に近い。鉄錆を少含む。	
S-420	10Y7/55	灰褐色	泥質	あり	あり	4.ラレンチア(Va)層にて形成。鉄錆少。鉄錆をほとんど含まない。	

(2) 遺構と遺物

調査区設定の理由のひとつであった2個の石材は、I層（表土・近代盛土）の上に載っており、石組側溝等の遺構としての性格をもたないことが判明した。

S-1420（ピット） IVa層上面が北東へ下降する肩部にあたるところ、調査区南東壁面に一部かかるかたちでピットを検出した。径45cmを測り、埋土は上層のIVb層とほぼ同じである。

出土遺物 I～III層で瓦片少量（33点）を検出した。



第16図 4トレンチ出土遺物実測図（1/3）

第8表 4トレンチ出土遺物記録表

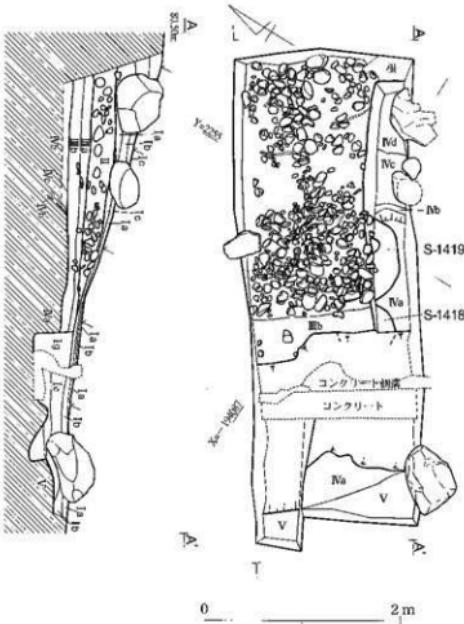
遺物番号	地盤	遺物名	測定・調査	大きさ (cm)	特徴 (各部の半径はcm)
海抜同 1	新アス	?	—	0.17	粘土質、無底、直角、表土：砂、長さ（7.3）、幅（4.2）、高さ（2.2）

5. 5トレンチ

4トレンチの北側、約2m離れてほぼ平行に5トレンチを設定した。発掘前の状況は4トレンチとほぼ同じで、道路の北東側に路面より低い平坦部が幅3mほどあり、そこから先は高さ約1mの土壘を形成し、道路から8～9mで谷側への急斜面となる。道路沿いの平坦部に長径70cm程の石材1石、土壘の斜面部分にそれぞれ長径40cm・60cm程度の石材2石が露出しており、これら石材および土壘の性格確認を目的として5トレンチを設定した。

(1) 層序

土層は、近接している関係もあって4トレンチ・5トレンチで類似する部分が多く、土層名（番号）も共通のものを付した。I層は新旧の表土・近代の盛土、およびコンクリート側溝周辺の擾乱土層である。調査区北東端の土壘の上部では、盛土を含めて厚さ50cmに達する。II層は上塗を主に形づくっている様層である。最大の厚さ30cm程もあるが、南西側（道路側）にむかって急速に薄くなり、直接現表土に接してコンクリート側溝手前で消滅する。IIIa・IIIb層はII層の下全体に広がり厚さ20cm程度を測る。II・III層とも近代遺物を含まず、瓦片少量が出土したのみであるが、II層には棟瓦らしき小片が認められた。IVa層は、IIIb層の下、コンクリート側溝の周辺に大きく広がり、調査区北東端から1.7m付近で北東側へ落ち込む。そこからさらに北東側には、IVb・IVc・IVd層が斜面を埋めるように堆積し、IVa層を含めたその上面は一體の水平面を形成する。切土・盛土を伴う整地面であろう。V層は明瞭な洪積世堆積層（地山）である。



第17図 5トレンチ遺構平面・断面図（1/50）

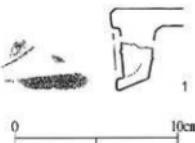
(2) 遺構と遺物

地表に露出していた3個の石材はI層(表土・近代盛土)の上に載っており、遺構としての原位置を保っていないことが判明した。

S-1418(ピット) 前記S-1419と同一面で南西側に検出した。これも略円形を呈するものと思われるが、南西側半分程はコンクリート側溝の掘り方で壊され、残りの大半も北西側のサブレンチ外となる。側溝掘り方の壁面に遺構断面がかかるており、そこで観察すると径60cm、深さ30cm程度を測る。

S-1419(ピット) 南東壁サブレンチ内のIVa層上面に、一部北東側への落ち込みにかかるて検出した。半分以上が北西側のサブレンチ外であるが、円形ないし椭円形と見られる。検出長85cm、検出幅25cmを測る。

出土遺物 I～III層で瓦片33点検出。



第18図 5トレンチ出土遺物実測図(1/3)

第9表 5トレンチ出土遺物註記表

発掘番号	深さ	遺物番号	種類・状態	重量(g)	特徴(測定値の単位はcm)
第286:	耕作层	103	瓦	6900	造成:良好、底土:軟、黄褐色(3.3)、瓦色2.0

6. 6トレンチ

道路脇から土塁に直行する状態で東西6m、南北2mのトレンチを設定した。道路側斜面に長径45cmの安山岩系の石材が露出している。土塁は道路に近接した状態で大きく隆起し、背後の東側は谷に向かって急に傾斜する。高さ1.6m、幅7mを測り、この付近では直線状に道路に平行する。これらの石材や土塁の性格解明を主目的に調査を行った。

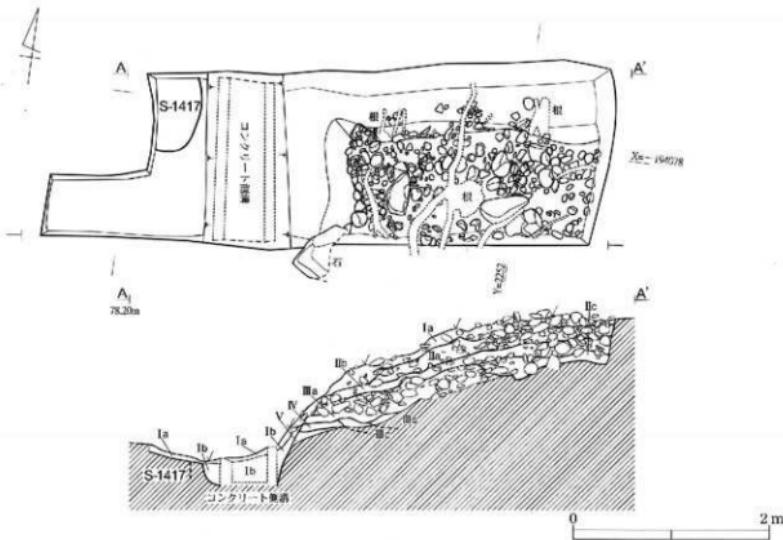
(1) 層序

層序はI層(表土・擾乱)、II層(盛土)、III層(整地層)、IV層(旧表土)、V層(地山)の5層がある。I層には径15cm大の円礫を非常に多く含む。土塁の傾斜面に露出した石材は、I層の表土中に含まれていることから、近現代に移動したものと判断できる。II層はa～cの3層があり、明黄褐色シルト質粘土層が主体的である。I層と同様に多くの円礫と少量の瓦を含んでいる。最下層面からは安定した状態で残存状況が良好な数枚の瓦が出土した。III層は黄褐色シルト層を主体とし、IIIa～IIIcの3層がある。何れもしまった土質を呈し、IIIb・IIIcの土層内には地山の黄褐色土等が径1～5cm大のブロックとして混ざっていることから、いずれも基盤整地等のための整地層と考えられる。IV層は地山直上に堆積している旧表土である。このIV層は、西側斜面地の一部を切り込み、段を有しており、この段の上面からIIIa～IIIcの整地が行われている。IV層は堆積の前後関係からみると、III層の基盤整地以前にまで遡ることが推測できる。V層は黄褐色シルトの地山である。

(2) 遺構と遺物

S-1417(土坑) 調査区西端にて土坑の一部を検出した。地山であるV層上面より切り込まれている。平面形状は西・北側が調査地外であるため全形は不明であるが、梢円形を呈するものと考えられる。規模は検出長0.75m、検出幅0.45mを測る。埋土は地山の黄褐色粘質シルトのブロックを少量含む黄褐色シルトである。

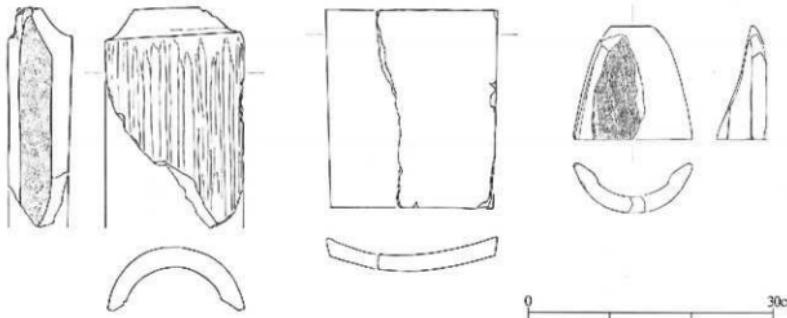
出土遺物 I層:丸瓦1点、輪違1点、崩平瓦1点 II層:平瓦2点、駒巴瓦1点 III層:平瓦2点、垂文軒棟瓦1点、棟瓦1点



第19図 6トレンチ遺構平面・断面図 (1/50)

第10表 6トレンチ土層記表

地質	判別	主 色	土 壤	土 生		考
				上位色	下位色	
Ia	HYR32	黒褐色	黒褐砂シルト	なし	なし	表土、礫 (径3cm~15cm大) を多く含む。
IIa	HYR22	黒褐色	黒褐砂シルト	あり	なし	コンクリート・樹木根付土、礫・礫砂を多く含む。
IIIa	HYR26	黒褐色	シルト	なし	なし	表土、礫 (径3cm~15cm大) を多く含む。
IVa	HYR54	灰褐色	粘質シルト	あり	なし	透水性 (5cm~15cm大) を多く含む。
Va	HYR66	明褐色	シルト質粘土	あり	ややあり	透水性良好、礫 (5cm~15cm大)、既存状態が良好な状態を含む。
VIa	HYR54	灰褐色	粘質シルト	あり	ややあり	地盤堅密、崩さない。
IIb	HYR81	灰褐色	粘質シルト	あり	あり	地盤堅密、津山岩壁モック (幅1~3m) を多く含む。
IIIc	HYR56	暗褐色	シルト	あり	あり	地盤堅密、礫 (径1~5cm)、津山モックを多く含む。
IV	HYR42	灰褐色	粘質シルト	ややあり	なし	目土。津山底上の自然堆積。整地を行う以前の表土層。
V	HYR26	暗褐色	粘質シルト	あり	あり	礫 (径1cm大) 少量と動物ブロック (前田色粘質シルト) を少量含む。
S-1417	HYR56	暗褐色	粘質シルト	あり	あり	礫 (径1cm大) 少量と動物ブロック (前田色粘質シルト) を少量含む。



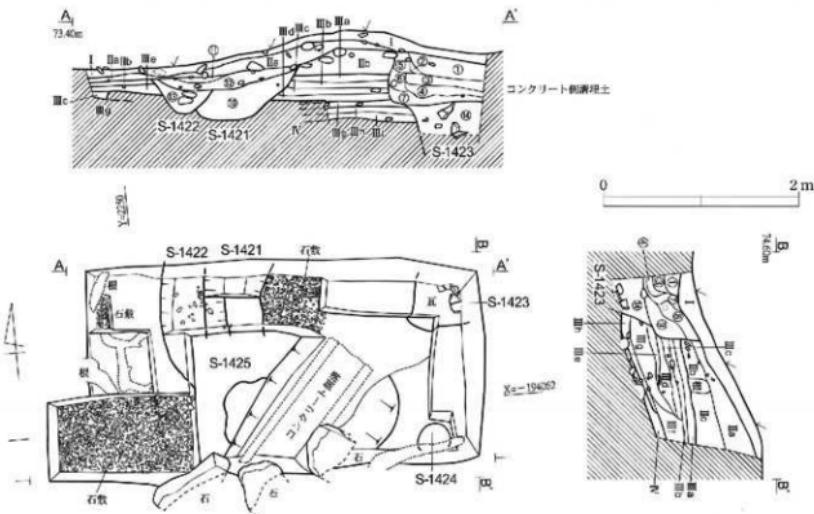
第20図 6トレンチ出土遺物実測図 (1/6)

第11表 6トレンチ出土遺物記表

遺物番号	種 類	遺物番号	遺構・層位	重さ (kg)	特徴 (計測値の単位はcm)
第20回 1	瓦瓦	156	I (コンクリート裏面)	0.62	瓦瓦: 斜斜、長さ (77.4)、幅 (17.1)、高さ (5.9)
第20回 2	瓦瓦	137	II	0.05	瓦瓦: 斜斜、長さ (24.1)、幅 (14.5)、厚さ (2.0)
第20回 3	焼成瓦瓦	97	I	0.26	瓦瓦 (13) (推定古14枚度)、幅 (6.9)、厚さ (1.6)cm、平均厚さ (1.3)

7. 7 トレンチ

当調査区は、市道青葉城線の道路際から土壌の北端に直行する状態で、東西4.5m、南北2.2mのトレンチを設定した。土壌の傾斜面に3石の石材が露出している。西側は長辺1m、中央と東側は一边0.5mを測る安山岩系の石材である。西側の1石は長さ1m、幅0.25mの長角石に粗加工が施されている。土壌は道路に平行して南北方向に走行しており、背後の東側は谷筋に大きく傾斜し、高さ0.7m、幅6mを測る。これらの石材や土壌の性格解明を目的に調査を行った。



第21図 7トレンチ平面・断面図 (1/50)

第12表 7トレンチ土層記載表

序号	層位	土 色		土 壤	特 性		備 考
		上色	下色		構造	しまり	
I	10YR4/2	黒色	細砂シルト	なし	なし	表土	
IIa	10YR4/4	褐色	細砂シルト	なし	なし	粘土、内部 (1cm~2cm) を少量含む。	
IIb	10YR5/2	黒褐色	細砂シルト	なし	なし	粘土、間隔なくルート層に成る。	
IIc	10YR6/8	暗褐色	細砂シルト	なし	なし	粘土、黒褐色のルート層。	
IIIa	10YR7/6	暗褐色	細砂シルト	ややあり	ややあり	砂利層、崩れのない白色、黄色細砂シルト層が底部に水平堆積。	
IIIb	10YR8/6	暗褐色	細砂シルト	なし	なし	砂利層、岩盤状の山川フック (直径1~5cm) を多く含む。	
IIIc	10YR8/4	褐色	シルト	ややあり	あり	砂利層、シルト層に山川フックが非常に混ざる。	
IVa	10YR5/4	にじく黄褐色	細砂	なし	あり	砂利層、細砂山川フック (直径1~5cm) を多く含む。	
IVb	10YR5/3	にじく黄褐色	細砂	なし	あり	砂利層、崩れのない山川フック。	
Va	10YR5/8	茶褐色	シルト	ややあり	ややあり	自然堆積、崩山の二次堆積。	
Vb	10YR4/4	褐色	砂質シルト	あり	あり	砂質シルト層、底 (直径1~5cm) を多量含む。	
VIa	10YR5/6	明褐色	砂質シルト	あり	あり	砂質層、崩山の底 (直径1~5cm) を少量含む。	
VIb	10YR5/6	明褐色	粗粒土	あり	あり	砂利層、崩山山川フックを含む。	
VII	10YR5/8	暗褐色	砂質シルト	あり	あり	砂利層、山川フック (直径1~5cm) を多く含む。	
1	10YR5/7	黒褐色	細砂シルト	なし	なし	砂利層、崩山山川フックの上層部を、表土と同様の層析す。	
2	10YR5/4	にじく黄褐色	細砂シルト	なし	なし	コンクリート側溝北側堆積部の上層部。表土と同様の層析す。	
3	10YR4/4	褐色	細砂シルト	ややあり	ややあり	コンクリート側溝北側堆積部の上層。表土と同様の層析す。	
4	10YR5/1	黒褐色	細砂質粘土	ややあり	ややあり	コンクリート側溝北側堆積部の層理。表土と同様の層析す。	
5	10YR2/1	黒色	細砂シルト	あり	なし	コンクリート側溝北側堆積部の層理。表土と同様の層析す。	
6	10YR5/4	褐色	シルト	あり	あり	コンクリート側溝北側堆積部の層理。表土と同様の層析す。	
7	10YR5/6	暗褐色	砂質土	あり	あり	コンクリート側溝北側堆積部の下層部。表土と同様の層析す。	
8	10YR5/2	暗褐色	シルト	あり	ややあり	コンクリート側溝北側堆積部の層理。表土の層析上を含む。頂面の土。	
9	10YR5/6	暗褐色	シルト	あり	ややあり	コンクリート側溝北側堆積部の層理。表土の層析上を含む。	
S-421	10	10YR5/6	暗褐色	砂質シルト	あり	ややあり	砂質土 (10YR5/4) の(暗褐色)をブロックを含む。
S-422	11	10YR5/6	暗褐色	シルト	あり	なし	砂質土 (10YR5/4) の(暗褐色)を多量含む。
S-423	12	10YR5/6	褐色	シルト	あり	あり	砂質土 (10YR5/4) の(暗褐色)を少量含む。
S-424	13	10YR5/4	褐色	細砂質粘土	あり	あり	砂質土 (10YR5/4) の(暗褐色)を少量含む。
S-425	14	10YR5/2	にじく黄褐色	砂質シルト	あり	あり	下層にはビッカーリー材、地盤内の土層間に瓦が散在出した。壁 (100cm) も多く含む。
S-426	15	10YR5/6	暗褐色	シルト	あり	あり	ビットモードは、地山ブロック、回漕 (5cm)、真小片を少量含む。
S-427	16	10YR5/1	にじく黄褐色	シルト	あり	あり	ビットモードには地山ブロック (5cm)、壁 (100cm) を少量含む。

(1) 層序

層序は上位から I 層（表土・擾乱）、II 層（盛土）、III 層（整地層）、IV 層（地山）の 4 層がある。I 層は表土と擾乱（近現代の削溝）がある。表土は腐植質の黒色細砂質シルト、側溝埋土は黒褐色細砂質シルトを主体としている。石材は I 層の表土中に含まれていることから、近現代に移設されたものであろう。II 層は a～c の 3 層があり、明黄褐色細砂質シルトが主体的である。比較的に軟質の盛土とみられるが、近現代の遺物は含んでいなかった。III 層は IIIa～IIIi の 9 層があり、明黄褐色細砂質シルトを主体とする整地層である。IIIa～IIId・IIIh・IIIi については地山の黄褐色土、岩盤等を径 1～5cm 大のブロックとして混入しているが、IIIc については純粋な細砂層である。また、IIIg については細砂質シルトに径 1～1.5cm 大の円窓を多く含んだ砂利層である。当 IIIg は上下の整地層に挟まれている関係から同一の性格を有するものとも考えられるが、調査区の西側に於いては IIIf より上層を確認することができなかつたことから、整地層以外の疊敷き等の性格を有するものであろう。IV 層は多くの礫を含んだ地山の礫層である。

第13表 7 トレンチ出土遺物註記表

目次番号	種類	遺物番号	測定値	重さ (kg)	形状	特徴
第03回 1	軒丸瓦	121	E	0.59	丸軒文、底成：良好、面下：軒、直徑 15.5cm、厚さ 3.0cm、幅 2.5cm	
第03回 2	翼牛瓦	164	E	0.44	他成：良好、軒上：面、直徑 12.2cm、幅 3.0cm、厚さ 2.3cm	

(2) 遺構と遺物

S-1423 (ピット) 調査区北東角にて南西側の一部を検出した。ピットの切り込み土層は、コンクリート側溝に切られているため正確な位置を確認することはできなかったが、層位の高さからみると IIIg 層より上位と考えられる。北側半分が調査地外であるため全形は不明であるが、不定形を呈するものと考えられる。断面形状は逆台形を呈する。規模は検出部分から径 0.3m 以上、深さ 0.35m 以上を測る。埋土には多くの瓦片を含んでいた。

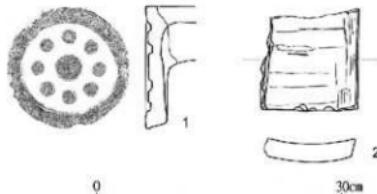
S-1424 (ピット) 調査区南東部、上壁北端斜面にあたる部分で検出した。盛土である IIa 層上面より切り込まれていて。規模は直径が 0.5m を測り、少量の円窓（径 5cm 大）と数点の瓦片を含んでいた。

S-1425 (ピット) 調査区中央の東側にて円形のピットを検出した。平面形状は部分確認であるため不明である。断面は盛土である IIb 層より切り込まれた逆台形を呈する。規模は検出径が 0.5m を測る。埋土は地山のブロック（径 1cm 大）を少量含む。にぶい黄褐色粘質シルトである。

S-1421 (溝) 調査区中央の北辺において一部を検出した。IIb 層上面より切り込まれて、南北方向に走るものと考えられるが、検出長がわずか 0.5m であるため全容は不明である。検出幅は 0.4m を測る。断面形状は幅広い「U」字状を呈する。埋土内には少量の円窓（径 5cm 大）を含んでいた。

S-1422 (溝) 調査区中央の北辺において一部を検出した。溝は IIb 層上面より切り込まれており、東側に隣接する溝 S-1421 を切っている。南北方向に走り、南側で東側へ大きく円弧を描いているが、その東側は未調査であるため全容は不明である。規模は検出長が 1.2m、幅 1.1m を測る。断面形状は「U」字状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトである。埋土内には少量の円窓（径 5cm 大）を含んでいた。

出土遺物 II 層：九曜文軒丸瓦 1 点、棟瓦 1 点、翼牛瓦 1 点、駒付平瓦 1 点



第22図 7 トレンチ出土遺物実測図 (1/6)

8. 8 トレンチ

8 トレンチの調査地は、大手門より本丸への登城路と清水門や沢の曲輪からの登城路とが、「T」字状に合流する沢門の推定地である。さらに西側は中の曲輪の推定地でもあることから、登城路の中でも重要な地点と考えられる。

今回の調査は、沢門跡の検出と当門に伴う上部跡等の確認を主目的とした。調査区は、市道青葉城線の東側に位置する平場に東西3.5m、南北3.0mのトレンチを設定した。地形的には、青葉山丘陵の北側へ下がる傾斜地に位置し、北東側は清水門からの登城路に伴う石垣とによって落差約9mを測る。

(1) 层序

層序はI層(表土・擾乱)、II層(盛土)、III層(整地層)の3層がある。I層の表土は腐植した黒色細�質シルトを主体としている。擾乱は南北壁面にみられる表土から切り込んだ上坑である。この上坑内には多量の炭、焼土を含んでいる。II層はa～eの6層があり、明黄褐色粘土が主体である。土層の性格としては、比較的に軟質であるが、数多くの水平堆積の状況から、近現代の盛土と考えられる。この盛土を行っている崖地は、北西から南東方向に走る幅2.5m、検出長4.3mの溝状のものである。性格としては、幅広く浅い形状や底面に砂利を多く混ぜ、硬く叩き締められていることから、路面として使用されていた可能性が高い。

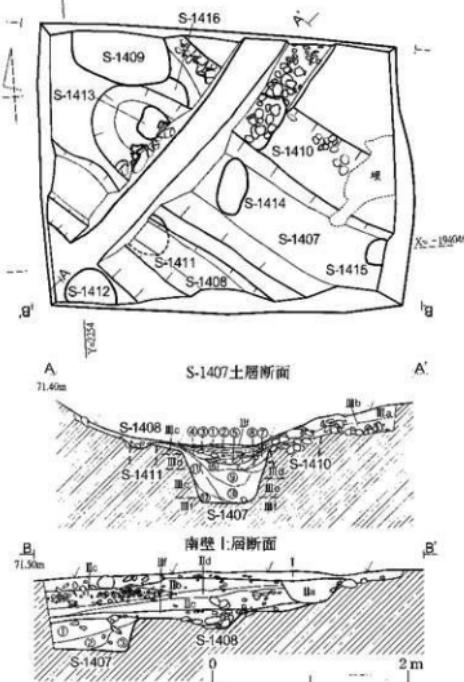
時期は、上面から昭和28年の十円硬貨が出土し

第14表 8トレンチセクションベルト・S-1407土層註記表

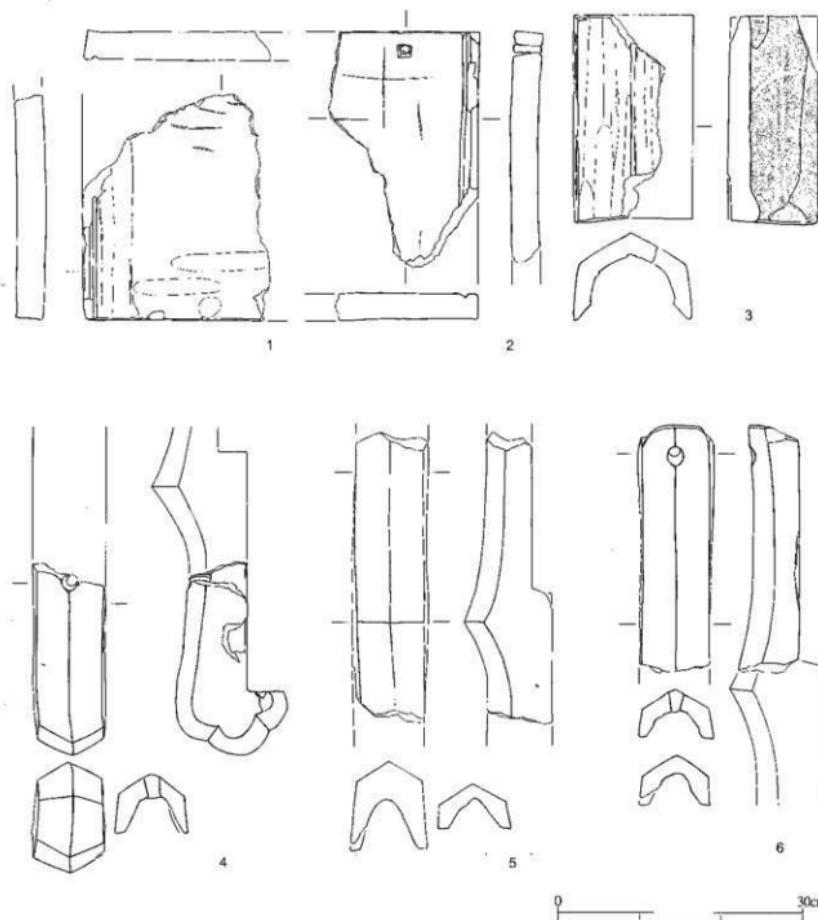
交配	親代	子 代	上色 上色 黄色	土質	生 性		備 考
					耐性 1.5m	1.5m	
	1. 10Y721	10Y721	上色 黄色	砂質土	なし	あり	高木十二、砂質土(10Y721)を多く含むと緑ぼっていろ。
	2. 10Y721	10Y721	に少し葉緑色 黄色	砂質土シルト	なし	あり	砂質土上の砂質土の下部。又、内陸(深さ~2cm)を多く含む。
	3. 10Y721	10Y721	に少し葉緑色 黄色	シルト	あり	あり	砂 - 内陸(深さ~2cm)を多く含む。熱帯雨林上層。
	4. 10Y721	10Y721	に少し葉緑色 黄色	砂質土シルト	あり	あり	熱帯雨林、地山(ブリック)(深さ1cm)を多く含む。
	5. 10Y721	10Y721	葉緑色	シルト	あり	あり	熱帯雨林、地山(ブリック)(深さ1cm)を多く含む。
	6. 10Y721	10Y721	葉緑色	シルト	あり	あり	熱帯雨林、地山(ブリック)(深さ~3cm)を多く含む。
	7. 10Y721	10Y721	葉緑色	シルト	あり	あり	熱帯雨林、地山(ブリック)(深さ~1cm)を多く含む。
S-407	1. 10Y721	10Y721	葉緑色	粘土質	なし	なし	田面土上層、地山(ブリック)(深さ~3cm)を多く含む。
	2. 10Y721	10Y721	葉緑色	粘土質	あり	なし	粘土質の粘土、粘土を多く含むが、無機性の無機物質。
	3. 10Y721	10Y721	葉緑色	粘土質	あり	なし	田面(深さ10cm)、堆積(深さ5cm)を多く含む。
	4. 10Y721	10Y721	無色	シルト	あり	なし	シルトと側面すな野原土(深さ10cm)を多く含む。
	5. 10Y721	10Y721	黄褐色	シルト	あり	なし	田面(深さ10cm)を多く含む。
	6. 10Y721	10Y721	無色	砂質土	なし	なし	土中に浮くる砂質土(深さ10cm)を多く含む。
	7. 10Y721	10Y721	葉緑色	砂質土	あり	なし	砂質土(深さ10cm)を多く含む。
	8. 10Y721	10Y721	葉緑色	砂質土シルト	なし	なし	2. 10Y721と同様の特徴(1)ブリック(10Y721)の近くに分布。
	9. 10Y721	10Y721	葉緑色	砂質土	あり	なし	堆積(深さ10cm)を多く含む。
	10. 10Y721	10Y721	葉緑色	砂質土シルト	あり	なし	堆積(深さ10cm)を多く含む。
	11. 10Y721	10Y721	葉緑色	粘土質	あり	なし	堆積(深さ10cm)を多く含む。
	12. 10Y721	10Y721	葉緑色	粘土質	あり	なし	堆積(深さ10cm)を多く含む。

第15表 8 トレンチ（南壁）土層註記表

支拂	履歴	千	百	十	土質	生	性	備 考	
								地性	山形
F	1978.2	零	零	零	砂質	生	性	零	零
F	1978.2	零	零	零	砂質シルト	なし	なし	零	零
Ba	1978.2	零	零	零	砂質土	なし	なし	零	零
Bb	1978.2	零	零	零	砂質土	なし	なし	零	零
Bc	1978.4	零	零	零	砂質土	なし	なし	零	零
Bd	1978.4	零	零	零	砂質土	なし	なし	零	零
Bc	1978.4	零	零	零	砂質土	なし	なし	零	零
Bc	1978.4	零	零	零	砂質土	なし	なし	零	零
Bc	1978.6	零	零	零	砂質土	なし	なし	零	零
Bc	1978.6	零	零	零	砂質土	なし	なし	零	零
S-407	1	1979.1	零	零	零	砂質土	あり	あり	山地ノゾク（第3回）を多くむ。
S-407	1	1979.1	零	零	零	砂質土	あり	あり	山地ノゾク（第3回）を多くむ。
S-407	1	1979.1	零	零	零	砂質土	あり	あり	山地ノゾク（第3回）を多くむ。
S-408	1	1979.2	零	零	零	砂質土	あり	あり	山地ノゾク（第3回）を多くむ。
S-408	1	1979.2	零	零	零	砂質土	あり	あり	山地ノゾク（第3回）を多くむ。
S-408	1	1979.2	零	零	零	砂質土	あり	あり	山地ノゾク（第3回）を多くむ。
S-408	1	1979.2	零	零	零	砂質土	あり	あり	山地ノゾク（第3回）を多くむ。



第23図 8 トレンチ平面・断面図 (1/50)



第24図 8 トレンチ出土遺物実測図

第16表 8 トレンチ出土遺物註記表

区分番号	種類	遺物番号	遺構・部位	重さ (kg)	特徴 (測定値の半径はcm)
第24選 1	漆平貝	196	S-14-3	(2.84)	水切り、輪成: 真好、肋七、輪、貝辺 (27.5), 輪 (24.0), 壁 (3.2)
第24選 2	漆平貝	197	S-14-3	(1.70)	水切り・輪六、輪成: 真好、輪上: 真、壳辺 (27.3), 輪 (17.1), 壁 (3.2)
第24選 3	漆灰陶片	198	S-14-3	(1.30)	輪成: 真好、肋十、輪、長さ (25.4), 横 (1.8), 高 (3.15)
第24選 4	陶瓦	199	S-14-3	(1.46)	脚口: 真好 (23.0), 最大幅19.5, 長さ11.5
第24選 5	陶瓦	200	S-14-3	(1.70)	脚口 (25.0), 最大幅19, 最大高10.5
第24選 6	陶瓦	201	S-14-3	(1.05)	長さ (28.9), 最大幅 (脚口以下) 9.2, 高さ (7.3), 機定重量: 約0.7

たことから現代に属する。Ⅲ層はⅢa～Ⅲfの6層があり、Ⅲaについては、にぶい黄褐色細砂質シルトである。円礫(径10cm大)や瓦片を少量含むが、軟質である点から、近世の盛土と考えられる。Ⅲbについては、円礫(径10～15cm大)や瓦片を多く含んだ近世の遺物包含層である。Ⅲc～fについては、地山の黄褐色土、岩盤等(径0.5～1cm大のブロック)を混入している整地層である。Ⅲf層より下位の地山等の堆積については確認できなかった。

(2) 遺構と遺物

S-1407(溝) 調査区中央にて北西から南東方向へ直線的に延びる溝である。整地層であるⅢb層上面より切り込まれている。規模は検出長が3.5m、幅1.1mを測る。埋土は主に黄褐色シルトである。下層にてピットS-1413・1414・1415を検出した。溝の性格としては、堀の柱穴を有する布掘溝と考えられる。

S-1408(溝) 調査区南側にて北西から南東方向へ直線的に延びる溝である。盛土であるⅡb層上面より切り込まれている。溝の全形は調査区外に継続しているため不明であるが、検出長が2.5m、幅0.5mを測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は黒色細砂質シルトである。埋土内には多数の円礫(径5～10cm大)を含んでいた。

S-1409(ピット) 調査区の北西端にて検出した大型のピットである。盛上であるⅡc層上面より切り込まれており、楕円形を呈する。規模は長径1.1m、短径0.5mを測る。埋土内には多数の円礫を散き詰めた状態で含んでいた。上面よりコンクリートとレンガの小片を検出した。

S-1410(ピット) 調査区中央の北よりにて楕円形のピットを検出した。整地層であるⅢb層上面より切り込まれている。規模は検出径0.6mを測る。埋土内には多数の円礫(径10cm大)と数点の瓦片を含んでいた。

S-1411(ピット) 調査区中央の南よりにて検出した。平面形状は円形を呈し、盛上のⅢb層より切り込まれている。規模は直径0.35mを測る。埋土内には少量の円礫(径10cm大)と小片の瓦を含んでいた。

S-1412(ピット) 調査区南西端にて円形のピットを検出した。整地層であるⅢb層より切り込まれている。規模は検出径が0.4mを測る。ピットの埋土は黄褐色シルト、埋土内には径10cm大の円礫と瓦片を含んでいた。

S-1413(ピット) 調査区北西側の溝S-1407北端にて検出した。溝上層のにぶい黄褐色土層より切り込まれている。平面形状は楕円形を呈し、規模は直径0.4m、検出深さ0.5mを測る。ピットの埋土は黄褐色シルトである。埋土内からは、残存良好な瓦片が多数出土した。ピットは布掘状を呈することから、堀に伴う柱穴の可能性がある。

S-1414(ピット) 調査区中央の溝S-1407床面にて検出した。平面形状は南北方向に長い楕円形を呈し、規模は長径0.58m、短径0.32mを測る。ピットの埋土は、地山のブロックを少量含んだ黄褐色シルトである。出土遺物は確認できなかった。遺構の性格はS-1413と同様の布掘状を呈することから、堀に伴う柱穴の可能性がある。

S-1415(ピット) 調査区南東端の溝S-1407床面にて検出した。平面形状は全くない円形を呈し、規模は直径0.3mを測る。ピットの埋土は、にぶい赤色シルトである。出土遺物は確認できなかった。遺構の性格はS-1413・1414と同様の布掘状を呈することから、堀に伴う柱穴の可能性がある。

S-1416(ピット) 調査区北西側にて検出した。南側は溝S-1407によって切られているが、平面形状としては円形を呈するものであろう。規模は推定直径が0.5m、検出深さが0.55mを測る。ピットの埋土は、白色系の地山ブロックを含んだ明黄褐色シルトである。出土遺物は確認できなかった。遺構の性格はS-1413・1414と同様の布掘状を呈することから、堀に伴う柱穴の可能性がある。

出土遺物 Ⅰ層：軒平無文軒棟瓦1点、辦平瓦1点 Ⅱ層：三引両文軒丸瓦1点、半瓦1点 S-1407：丸瓦1点、三引文軒棟瓦1点、軒棟瓦1点、駒付平瓦1点 S-1408：三引文軒棟瓦1点 S-1413：冠伏間瓦6点、面瓦1点、堀平瓦3点、駒付平瓦11点、駒凹瓦13点

IV 土壘の測量調査について

土壘の測量調査としては、沢門跡南側土壘と中門跡北側土壘の2か所を対象として実施した。測量調査範囲の面積は約1,835m²である。作業は平成18年3月1日から13日にかけて実施した。

測量の主たる目的としては、土壘の上に繁茂する樹木や降雨等の影響で、土壘の形状に経年変化が発生する恐れがあるため、現況の形状を詳細に記録することである。また、今後予定されている登城路の整備に向けて必要な詳細なデータを取得することである。

本報告書においては、測量図版の掲載は紙幅の都合等の関係で割愛した。



第25図 中門跡北側土壘（北から）



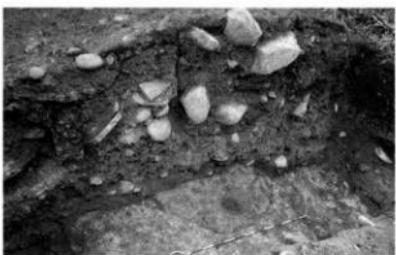
第26図 測量作業風景（北西から）

V まとめ

1. 大手門から本丸北面石垣下に至る市道青葉城線の左側に連なる高まりは、「仙台城跡3」や「仙台城跡4」等で「土壘」や「土壘状の高まり」等と表現され、複数の仙台城下絵図に描かれた登城路の土壘に伴う土壘と考えられてきた。しかし今回の調査では「土壘として構築された」ものとの確証を得るにはいたらなかった。道路側は近代以降の道路・側溝の敷設工事で大きく削平されたことが明らかであり、むしろ斜面壁が土壘状に削り残されたか、もしくは削平された土砂が盛られたものと思われる。
2. 3~6トレンチで検出された土壘状高まりを構成する礫層は、意図的に設置されたものであり、それが土壘構築を目的としたものではなく、登城路の構造や変遷に関わる重要な遺構である。その性格解明は今後の調査・検討に待ちたい。
3. 4~5トレンチのサブトレンチ下層で検出したIV層、特にIVb層以下の土層は、地山の洪積帯堆積層を削って谷側を大規模に埋めた整地層であることが判明し、登城路に関わる基盤整備に伴う造成土である。
4. 7トレンチの小石敷き面は、狭い調査区内のみの検出であるが明瞭な遺構面をなしており、その密度や安定度から石敷き遺構と認められ、沢門周辺または登城路の路面整備の状態を示している可能性が高い。
5. 8トレンチ検出のS-1407（溝）と、S-1413・1414・1415（ピット）は、沢門に取り付く崩の布掘り溝と柱穴の可能性があり、S-1413出土の瓦群は、駒瓦・堀平瓦が多く含み、堀上部に葺かれていた瓦と考えられる。
6. 2トレンチII層下層の桟瓦群は、他所からの移動廃棄を考えにくく、登城路土壘に使用された近世後期のものであり、築城初期の崩には駒瓦・堀平瓦が使用され、何度かの補修・建替えが行われていたと考えられる。
7. 4~7トレンチの、土壘状高まり上面や斜面に露出していた長径数十cm程度の石材は、すべて表土もしくは近代の盛土に載っており、城郭に伴う遺構を構成するものではない。



図版1 1トレンチ全景（北西から）



図版2 1トレンチ遺構検出状況（南東から）



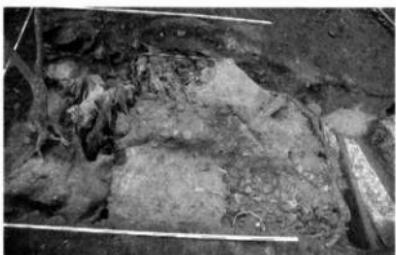
図版3 2トレンチ全景（南東から）



図版4 2トレンチ遺物出土状況（南東から）



図版5 3トレンチ全景（南から）



図版6 3トレンチ遺構検出状況（西から）



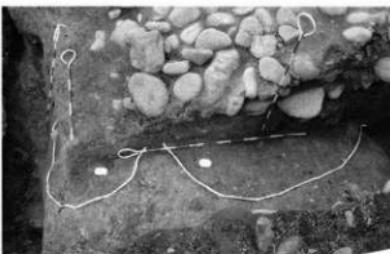
図版7 4・5トレンチ調査風景（南東から）



図版8 4トレンチ全景（南西から）



図版9 5トレンチ全景（西から）



図版10 5トレンチ遺構検出状況（南東から）



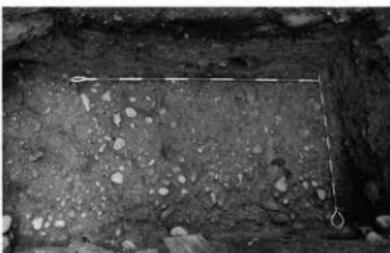
図版11 6トレンチ全景（西から）



図版12 7トレンチ全景（北から）



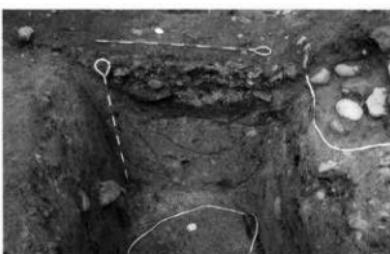
図版13 7トレンチ北壁土層断面（南から）



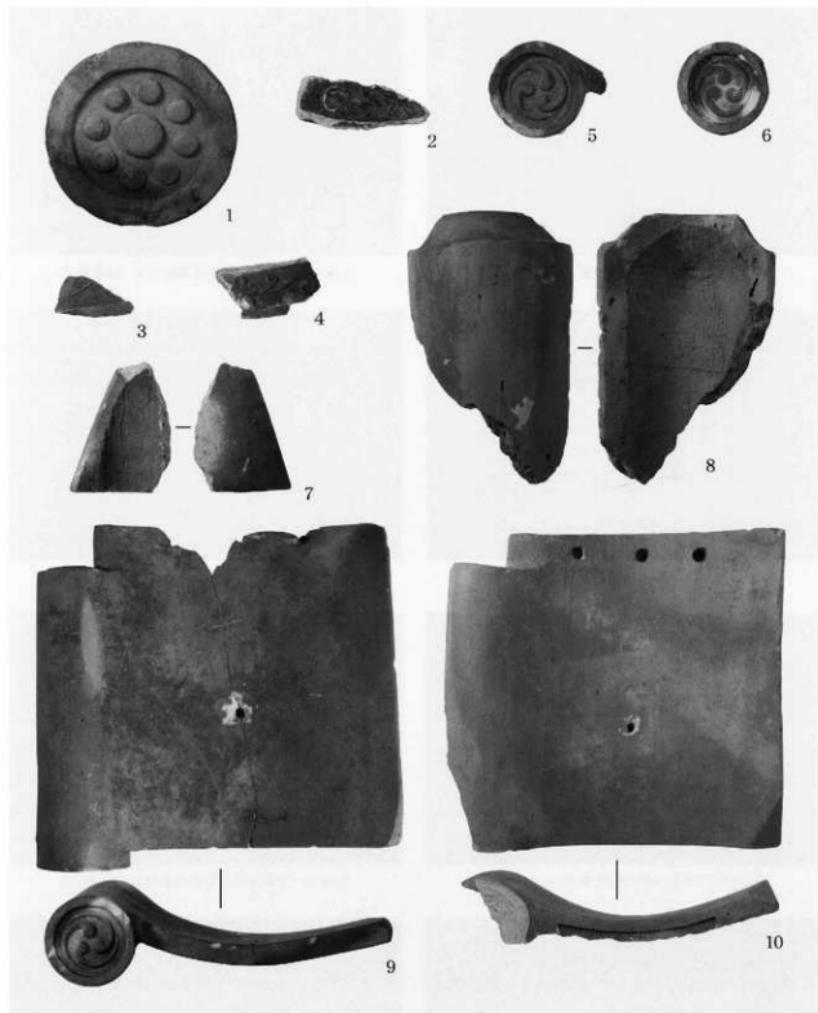
図版14 7トレンチ石敷検出状況（北から）



図版15 8トレンチ全景（北から）



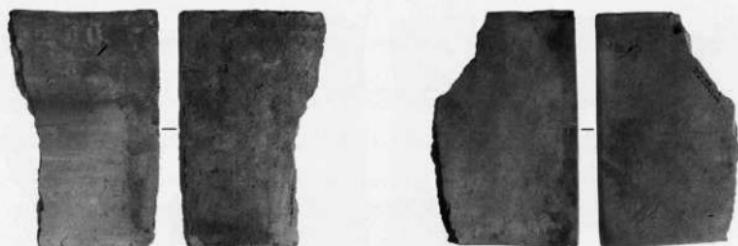
図版16 8トレンチS-1407土層断面



1. 九竪文軒丸瓦 7トレンチ No.121 第22図1
 2. 桔梗文軒平瓦 4トレンチ No.93 第15図1
 3. 軒平瓦 5トレンチ No.103 第18図1
 4. 桔梗文軒平瓦 3トレンチ No.67 第14図1
 5. 三巴文軒稜瓦 3トレンチ No.66 第14図2

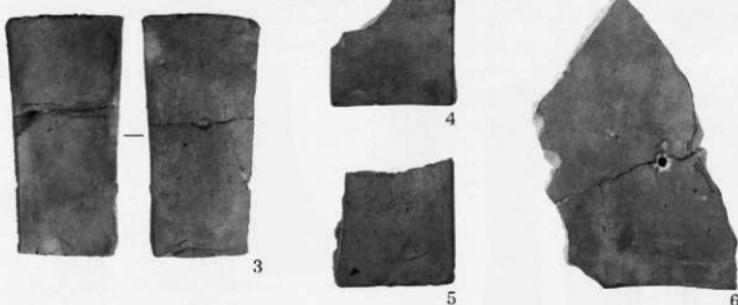
6. 三巴文軒稜瓦 1トレンチ No.8 第10図1
 7. 倒造瓦 6トレンチ No.97 第20図3
 8. 丸瓦 6トレンチ No.156 第20図1
 9. 三巴文軒稜瓦 2トレンチ No.42 第12図2
 10. 軒稜瓦 2トレンチ No.46 第12図4

図版17 出土遺物写真(1)



1

2



3

4

5

6



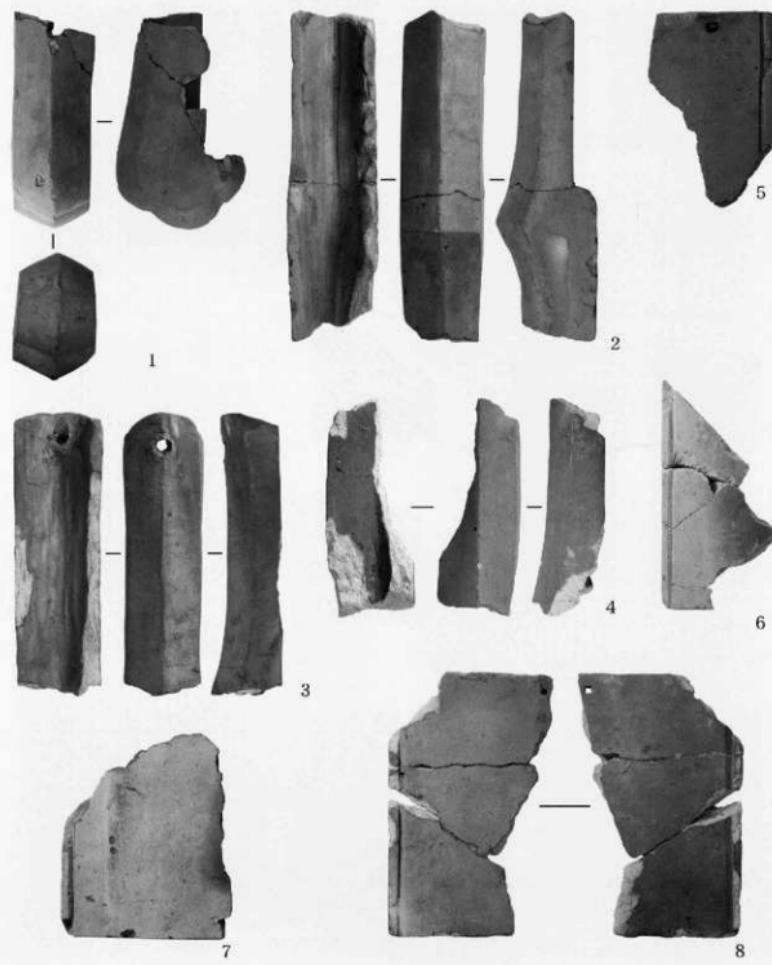
7

8

1. 平瓦 6トレンチ No.107 第20図2
 2. 瓢斗瓦 1トレンチ No.29 第10図2
 3. 瓢斗瓦 3トレンチ No.61・70 第14図5
 4. 瓢斗瓦 3トレンチ No.31 第14図3

5. 瓢斗瓦 7トレンチ No.161 第22図2
 6. 平瓦 3トレンチ No.130 第14図4
 7. 冠伏筒瓦 2トレンチ No.21 第12図1
 8. 冠伏筒瓦 8トレンチ No.166 第24図3

図版18 出土遺物写真(2)



1. 前瓦 8トレンチ No.77 第24B4
 2. 前瓦 8トレンチ No.180 第24B5
 3. 前瓦 8トレンチ No.88 第24B6
 4. 前瓦 1トレンチ No.181 第10B3

5. 榻平瓦 8トレンチ No.184 第24B2
 6. 榻平瓦 4トレンチ No.185 第10B4
 7. 榻平瓦 8トレンチ No.187 第24B1
 8. 榻平瓦 2トレンチ No.182・183 第12B4

図版19 出土遺物写真(3)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	せんだいじょうあと とじょうろ いちじょうさ					
書名	仙台城跡 登城路 1次調査					
副書名	平成17年度 調査報告書					
巻次						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第300集					
編著者名	橋本昭嗣・古川久雄・村尾政人					
編集機関	仙台市教育委員会					
所在地	〒980-8607 仙台市青葉区国分町3丁目7-1 TEL 022-214-8544					
発行年月日	2006年3月31日					
所収遺跡名	所在地	調査地点	コード		調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号		
仙台城跡	宮城県仙台市 青葉区川内地内	登城跡跡	4100	1033	2005.12.9 ～ 2006.3.13	75m ² (発掘調査) 1,835m ² (測量調査)
			北緯 東経	38°15'00" 140°51'35"		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
仙台城跡	城館跡	江戸時代	土坑 ピット溝	瓦・磁器	沢門跡南側上部を発掘調査し、 石敷き遺構とみられる整地層を 検出し、土塙所用の瓦が出土した。	

仙台市文化財調査報告書第300集

仙 台 城 跡
登 城 路 1 次 調 査

平成17年度 調査報告書 一

2006年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8554

印刷 株式会社 建 設 プ レ ス

仙台市青葉区新立三丁目2-10

TEL 022(022)0177

